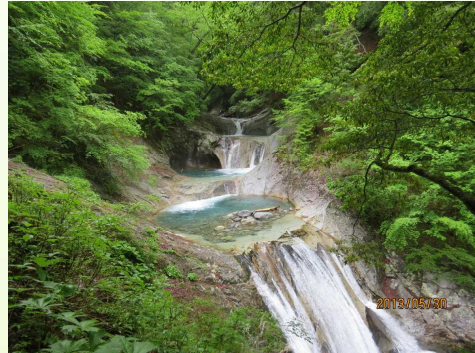


## 澗水松風悉説法

かんすいしょうふうことごと せっぽう  
澗水松風悉く説法



はや、五月となりました。

咲き競うような春の花も一段落。景色は一面、華やぎを抑えて、しっとりとした柔らかい新緑の装いです。さて、今回の禅語です。

### 澗水松風悉く説法

「澗水」は、溪川を流れる水のせせらぎのこと。「松風」は、松の枝を吹き抜ける風の事です。この禅語は、こうした溪川のせせらぎ、松をわたる風が、そのままお説法... 私たちに教えを説いてくれる法話なのだ、ということです。

私たちに生きるための知恵、いのちをまっとうするための指針を与えてくれるのは、何も釈尊や達磨さんのような人ばかりではありません。私たち自身の側に、ちゃんとした準備さえあれば、大切なことを教えてくれるものは身の回りにいくらでもあるのです。

優れた人がいくら懇切に教えを説いてくれても、それを受け入れる側に、素直さと謙虚さ、知識や決意、覚悟といった準備ができていなければ、たとえどれほど素晴らしい教えであっても、やはり耳に入ることはできません。

反対に、日頃の努力と心がけが稔り、自分自身の中に機が熟し、教えを受け入れることができるだけの準備が整っていれば、きっかけとなるものは、いくらでもあるのです。

唐の靈雲志勤禅師は、三十年の長きにわたって一心に修行を続け、或る時、咲き誇る桃の花を見て、それまでの疑問や不安がいっぺんに消え去り、禅の奥義に導かれます。そして、

ひと とう か じき  
一たび桃花を見てより、直に今に至るまで更に疑わず...

と、その喜びを歌っています。

どうげんぜんじ  
道元禪師にも、有名な歌があります。

峰の色 谷の響きも 皆ながら  
わが釈迦牟尼の 声と姿と

すいちようじゆりんねんぶつねんぼう ごと  
「水鳥樹林念仏念法の如し...」という言葉があります。

たにがわ な  
溪川の水も、鳥の啼き声も、木々を揺さぶる風の音も、すべてが  
ありとしあるものの、ありのままの姿です。ありのままの姿とは、飾る  
ことなく、いのちを輝かせている姿のまま...

ついで  
生き物は、溪川の水を飲み、植物の実を啄み、大地に巢を構え  
て生き抜いていきます。一滴の水、一吹き of 風、ひとかけらの土  
塊、ちっぽけな石ころ一つですら、何らかの形で誰かのいのちを  
支え、この世界の全体としての営みに、深く関わっています。

から  
いのちあるものも、いのちなきものも、お互い深く絡み合いながら  
動き、働いています。それがそのまま、念仏、念法... 貴い存在  
（仏）、貴く不思議な働き（法）... 人間が口でその名を唱え、讃  
えなくとも、世界は、そのままのありのままに光り輝いているのです。

たにがわ  
溪川のせせらぎと、松の枝をわたる松風...

ごぜんいし  
どっしりとした石を探しだして、それを坐禅石として、一人静かに  
坐る... 余計なことは全部放り投げ、こころをひたすら自分の呼  
吸に凝らし、出息入息、息の出入りに身心を委ね、ゆったり伸び  
やかに坐る... いつしか、自分の身体が溪川の流れ、吹き抜ける  
風と一つになる...

ぜんしんぜんれい  
全身全霊で、世界の、いのちの営  
みを感じる時、はじめて感謝の思い  
とともに、天地自然の説法が私た  
ちの耳に聞こえ、心に響いてくるの  
です。

